

学力の基礎をきたえ どの子も伸ばす研究会ニュース

学力研の広場

ホームページアドレス <http://gakuryoku.info/>

NO. 355

2024. 10. 5

学力研発行

常任委員長 岸本ひとみ

郵便振替 00920-9-319769

スマホは人を幸せにするのか？

東北大学加齢医学研究所 教授 川島隆太

「デジタルの活用で一人ひとりの幸せを実現するために」

2021年9月1日に発足したデジタル庁のホームページにある言葉です。国民生活の利便性を向上させ、官民の業務を効率化し、データを最大限活用しながら、安全・安心を前提とした「人に優しいデジタル化」社会を創るために、国は大きく舵を切りました。(中略)

スマホ利用時間の長い子どもたちの学力が低いことは、もはや常識になりました。教育関係者は、スマホ利用時間が長くなることにより、家庭での学習時間が短縮したり、睡眠の質が悪くなったりすることが主因と、科学的エビデンスのないまま「勘違い」しています。しかし、実態はより深刻で、脳発達の遅延の問題だったと考えられます。(中略)

国策でごりごりと進められている「人に優しいデジタル化」にあらがうことは無意味でしょう。ただ「人として幸せに生きる」ためには、オンライン習慣を必要最低限に抑えることが大事であると多くの方に知っていただきたいと願っています。

榊浩平「スマホはどこまで脳を壊すか」(2023.2 朝日新聞出版)

CONTENTS

◇特集「教育現場が抱える問題」◇

教師の「自由度」の喪失と教師のやりがい	金井敬之・・・2
ICTに囚われるか、使いこなすか	加藤英介・・・4
最近の教育現場が抱える問題	鈴木基久・・・6
理想を語り合える仲間がいるか？	丸小野聡暢・・・8
教育課題にどう向き合うか～「謙虚」に「貪欲」に～	古東秀一・・・10
教師が元気にイキイキと働いてこそ～その条件づくりを	図書啓展・・・12

◇連載◇

「どの子も伸ばす」を本気で考える連載 72 「意欲格差」に負けない！公立小学校へ	岡本美穂・・・14
考える力をつけるための授業の組み立て方④教科書にない問題を考えさせる	荒井賢一・・・17
社会科(歴史) 授業力アップ講座 ②指導法研究③	深澤英雄・・・19
「先生のための学校」講座報告	丸小野聡暢・・・21
局長・常任委員長だより	・・・22
学力研カレンダー	・・・23

※久保先生の連載は、都合により休載させていただきます。

教師の「自由度」の喪失と教師のやりがい

金井 敬之

学校現場が抱える問題とは

今の教育現場が抱える問題は「できない子をできるようにする」「授業の腕を上げて子どもたちに力をつける」ということが、多くの教師の第一義的（最も大切な根本的な意義や価値）な仕事ではなくなったことだと自分は考えている。

数年前から（もっと以前からか？）学校現場の多忙化が進み、「履修主義」（ここでは、できない子を結果的に放置して子どもたちの理解の程度にかかわらず授業をすすめテストを実施し評価することをいう）にならざるをえない状況が生まれた。

このことは、一般社会の「自己責任論」が学校現場にも拡がってきたものであり、勉強ができるのもできないのも本人の責任にされるといいう状況になってしまっている。また、次のような主張を読んだことがある。『以前学校では、先生の言うことには素

直に従うものだという枠組み（フレーム）

の中で教育が行われてきた。自由と平等が優先されるリベラルな社会である現代は、先生の指示に従わない自由、強制されない自由、教師と児童は対等であるという考えが主流となり、上記のようなフレームは崩れた。その結果、教師が有効な指導法や手立てを示しても、子どもがそれをやらないことが増え、教室では学力も人間性も向上しないという状況が現れている。』

この主張が正しいとすると（その主張には「学級自治」という視点は無いが）、子どもの学力や人間性は、遺伝や教室以外での環境次第ということになる。それはもはや教育ではないと思う。

教育とは、能力や家庭環境にかかわらず（もちろん一定の影響を受けるかもしれないが）すべての子どもたちの向上的変容を促す活動でなければならない。

学校現場にもたらした4つのこと

学校現場の多忙化、履修主義、自己責任論、フレームの崩壊などの結果、4つのことが起こった（相互に関連しているが）。

教師の「自由度」の減少、子どもの学力低下、学力研など民間教育サークルの参加者数減、教師のやりがいの喪失である。

教師の自由度が減少すると「やらされ感」が増加する。この「やらされ感」は、教師のやりがいを奪い、精神も蝕む、やりがいがあれば、長時間労働やブラックな職場であつていいという立場は決してとらないが、「やらされ感」がいちばんの問題だと思おう。

学力低下問題でいえば、全国学力テストを例に出して考えたいと思う。自分は平均点で全国の市町村を序列化する学力テストに反対であるし、学力テストの問題が子どもたちの学力を測るものとは思っていないが、学力テストの問題が解けなくてもいいという立場もとらない。

2021年の学力テスト出題の「3辺の長さ（3cm、4cm、5cm）が示されている直角三角形の面積の求める問題（図には直角のマークもある）」の正答率が55

4%である。2辺だけが提示されていると
もつと正答率が上がったと思うが、3辺が
書かれていると半分近くの子どもが不正解
になる。「8人に4Lのジュースを等しく分
けたときの1人分を求める問題」の正答率
が56.7%であった。8わる4か4わる
8かのどちらかであるが、正答率が50%
台というのはまさに「当てモノ」である。

2022年の「りんご果汁が20%含ま
れている飲み物の量が1/2になれば果汁
の割合は、①1/2になる②2倍になる③
変わらないという3択の問題」であるが、
この問題は、飲み物の量が半分になったら、
割合（濃さ）はどうなるのかという問題で
ある。飲み物の量が変わっても濃さは変わ
らない。飲み物を分け合ったら、味が濃く
なったり薄くなったりしたら大変である。
この問題の正答率は21.7%である。3
択なので統計的には33%あってもいいの
だがそれ以下である。

2023年の「4きやくの重さが7kg
のいす48きやくの重さは何kgかを求め
る問題」の正答率が55%。1きやくの重
さを計算すると計算が複雑になる。48き

やくは4きやくの12倍と考えるといい。
今年（2024年）の「直径22cmの
球がぴったり入る立方体の体積を求める式
を書く問題」の正答率が36.9%であっ
た。一辺が22cmの立方体の体積を求め
る式ならもつと正答率が高くなると思うが、
球がぴったり入るといふ問題になると正答
率が3割台になる。

これらのことでもわかるように、子ども
たちの学力低下は明らかで深刻である。「こ
の程度の問題（あえてこの程度の問題と言
いたい）を全国の6年生の半数が解けない
という事実」に愕然としている。「この程度
の問題を出題しておけば半数がまちがえるだ
ろう」と、もし文科省が思っているのなら
それは腹立たしく悔しい。

教師の「自由度」があつてこそその授業の
工夫であり、学力づくりである。教師の「自
由度」がなければ、学力づくりの実践はで
きない。100マス計算も、ことわざカル
タもできないのである。

教師の関心事は

今の教師の関心事は、学力づくり、授業
づくりよりも児童対応、保護者対応である。

いじめなどの重大な事案や保護者からの厳
しい苦情などがなく1年間を「無事」に過
ごすことがいちばんの願いになっている
（わからないでもないが）。

そんな状況の中で、週末に身銭を切つて
集会や講座に参加する、書店に足を運ぶと
いう教師は少ない。教師にかつてのよう
な自由度がなくなり、授業や学力づくりに役
立つ知識や手立てを研究サークルや教育書
から学ぶ必要性や余裕がないのが実情だ
と思う。

夢や理念の共有

このような厳しい状況であるが、子ども
たちに学力をつけたい、自分の授業力を高
めたいという思いは、教師の「根源的な」
思いである（と強く思う）。それは、学力研
究の夢や理念そのものである。その「夢や理
念」を多くの教師と共有したい。学力研
究会の参加が増えることは、子どもたち
の学力が高まることである。

そのことで今の厳しい現状を改善できる
のではないか。道のりは果てしなく遠く険
しいが、それこそが厳しい現状の解決策だ
と思う。

ICTに囚われるか、使いこなすか

加藤 英介

現場の課題

タブレットが当たり前のように学校現場に入ってきた今、先生方の教室はどのように変わってきたらいいか。教室の中で文具と同じように使われているクラス、保管庫に宝が眠っているクラス。この二極化が現状である。とくに、タブレットや新しいことを取り入れることに苦手意識のある先生は年間に数回程度しか触れていないという話もある。たしかに、タブレットを使わなくても授業はできる。日常生活で困ることはないだろう。しかし、これからの社会を生き抜く子どもたちにとって、必要不可欠である技能の一つは、タブレットやパソコンなどのICT機器の最低限の活用である。現代社会を見れば一目瞭然である。ネットを使いこなすことができなくても困らないかもしれないが、ネットを使いこなすことによつて、多くの人と出会い、仕事ができ、人の役に立つことができる。だが、そこ

まで考えている教師がどれくらいいるのだろうか。中学校や高校では、仲間がライバルとなり、差が生まれることは確実である。子どもたちは、担任の先生を祈るしかなく、教師ガチャと言われても仕方がないだろう。ICT格差は喫緊の課題である。学校でそろえよう、学年でそろえようとしても、教師のスキルと向上心がなければ難しいのである。

ICTのよさは、今までできないと言われていた不可能を可能にできることである。授業面では、話すことが苦手な児童の意見や一人ひとりが考えていたことを記録として残すことができる。普段は会えない人の話を聞くことができたり、学びたいことを学びたい人から自由に学び、探究の一步を踏み出すことができたりする。生活面では、日記を書くことで、一年間や六年間の心と体の成長をメタ認知することができる。もちろん、そんなことをしなくてもクラスにいる40人が

考えていることや個別の課題については把握できる教師もいるだろう。しかし、自分はまだまだその領域まで到達していない。未熟そのものである。だからこそ、ICTというアイテムの力も駆使して子どもの力を最大限引き出したいと考えている。

授業で活用してみると・・・

算数を例に考えてみる。学力研では「発問、板書、ノート」を大切にしている。実際に自分自身もこの三種の神器によつて、子どもたちの理解を深めてきた。発問したことをみんなで作成、意見を板書しながらノートにまとめる。それぞれの考えたことや次への疑問を振り返りに書きながら授業をつなげていく。理解と習熟を繰り返しながら学習習慣を身に付けさせることによつて学力を定着させてきた。だが、40人の思考を把握することは到底できなかった。ノートに書かれていることは事実として受け止めることはできるが、授業中に把握することは簡単ではない。そんなことを実感したのは研究授業の後の反省会である。

教務先生が次のように指導してください。

「加藤先生の授業は、理解がしやすい。それは、精選された発問をしていることと、子どもたちが聞こうとしている姿勢に表れている。学級づくりができていて、普段の子どもたちとの関係があるからこそその授業だった。一時間があつというまに過ぎ、できる子どもできない子ども楽しんで受けている印象だった。改善点をあえていうなら、子どもたちが説明をしているときに『えっうん?』というつぶやきを教師が聞いていたかどうかである。」と教えてくださった。私は、完全に聞き落とししていたのである。

これ以降、見落とし聞き落としを防ぐためにチャットを使って子どもたちの声を間違いなく拾えるようにしていこうと考え授業改善をした。課題把握をしたら、一人で考える時間を取る。その際に、チャットに考えを書き込ませる。わかる・わからないもそうだが、解き方や悩んでいる所、多様な考え方が展開として予想される。書き込む中で、交流したい人のところへいき、わからないことを教え合う聞き合う時間が必然的に生まれる。教師は、その姿を観察し

ながら、どこを話し合いで吟味すべきかに集中する。チャットを見ながら、普段は大人しい子や苦手な子を生かしながら進める。分らないことが分かったこと、さらに悩んだところを投げかける。また、意見や考えに対して、納得するだけでなく批判をもつて参加したり、言っていることが理解できなければ言い換えたりしながら一人ひとりの意見を全体の理解として練り上げる。

全体の話し合いでは「相手の意見を分かってもらう」ということが重要である。言っていることはよくわからないけど、多分〇〇ってチャットには書いてあったから〇〇ではないだろうかと言いたいことをかみ砕いて代わりに伝えることで、人の気持ちや思いをくみ取るこのできるクラスにする。

このような授業は日々の訓練が必要である。地道に積み上げ、どんなことでも臆することなく意見を伝えようとする子どもを育てるためにも、ICTの力も借りながら取り組んでいきたい。

新しい取組をするときには、反発もある。周りの理解や協力は必要不可欠である。そのため、授業だけでなく、校務や仕事の

効率化を図り、今まで時間をかけていた掲示物やプリント類、日々の連絡にいたるまで、ICTの力で時間にゆとりをもたせた。これに関しては、苦手な先生が喜ぶことは何か、どんなことに困っているのだろうかということを探りながら、進めた。先生方のニーズに応えていくことで、よさを知ってもらい、使いながら慣れてもらう。そして、子どもたちに還元していき、よい循環をつくっていく。実際に、今の学校では、

当たり前のように各学級がタブレットを開けながら授業をしている。日々のタブレット日記から、今まで以上に情報共有できるため、元気のよい児童に対しても、励ましの言葉を多くの職員がかけてくれたことにより、不登校の児童が登校できるようになり指導にズレがなくなってきた。

本来であれば、そんなことをしなくても直接伝えることができれば問題はないかもしれないが、伝えること自体が難しく、話したくない子が多くなっている今、使えるものは全て使いながら、子どもたちが安心して安全に過ごせる学級・学校にしていきたい。

最近の教育現場が抱える問題

鈴木基久

私は今年25回目の学級担任をしている。日頃感じていることについて考えをまとめてみた。

1 担任不足、教員不足

全国的に教員不足が話題になって久しい。今年度は、教員採用試験の日程が前倒しされ、来年度はさらに日程が変更になるところもあると聞く。必要な新規採用教員を確保できなかった県では、この秋に追加の教員採用試験を行って来年度の教員を確保しようという動きもある。

浜松市では、昨年度から教員不足が深刻で「はままつ式30人学級」で4学級だった学年が翌年3学級になっている。理由は担任が見つからないためだ。子どもの数は減っていないので、1学級の人数は30人

下から35人になっている。私が担任した学年がまさにそうだった。今年度もその状況が続いており、「はままつ式30人学級」は絵にかいた餅になっている。個別の支援が必要な子が何人もいる中で学級の人数が増えることは、担任にとって大きな負担となっている。

私は、令和四年度と令和五年度に続けて2年生の学級担任をした。同じ学校で同じ学年を続けて担任した場合、2年目の方が年間の見通しをもつことができ、前年の実践を修正・発展させられるので上手くいくことが多い。しかし、学級の児童数が増えた令和五年度はそうではなかった。考えてみれば当然だが、学級の人数が増えたからと言って、授業時間も給食の時間も放課後の事務処

理時間も増えるわけではない。同じことをしていても、予定通りに終わらないことがいくつもあった。前年度は取り組んでいたことが、1か月遅れになったり、あきらめたりしたこともあった。すごく重たく、軽快に事が進んでいかないように感じることも多かった。

この感覚を裏付けるデータを見つけた。それは多層指導モデルMIMのアセスメントのデータである。年間5回行っていたアセスメントの平均点を比較すると、4月時点では平均点は令和四年度の学年の方が低かったのだが、その後の伸びが令和四年度の方が大きく、2学期後半のアセスメントでは、令和五年度の学年の平均点を超え、3学期にはその差をさらに大きくしていた。もちろん、どちらの年も担任は一生懸命に指導していた。このように、学級の児童数が多いことは、望ましい学習環境を整える視点から、とても重大な見過ごせない問題であると言える。

2 コロナ禍の影響

コロナ禍をどの年齢で経験した学年なのか話題になることがある。昨年の冬のフォーラムでは、幼児教育の時期に群れ遊びを経験できなかった1年生が、鬼ごっこや縄跳びができないことが話題となった。鬼になると次々離脱していくのである。

前任校で4年間のMIMのデータを分析したところ、入学直後にコロナ休校を経験した学年は、学力的には落ち込みが少なく、むしろその下の幼児教育でコロナ禍を経験した学年の方がアセスメントの得点が低く、その傾向は1年、2年と追跡調査した結果でも変わらなかった。

コロナ禍の間は、参観会や学級懇談会も行われなかった。特に懇談会は3年間くらい実施されなかった中で、懇談会という学校文化が断絶された。参観会には出席しても、懇談会には残らない保護者が増え、保護者同士のつながりがなくなってきたように感じる。

3 デジタルの弊害は考えないのか

1人1台端末を活用するように言われている。端末を使っていけないと分らないことがあるので、効果的な使い方を模索している。一方で、アナログのよさを考えていない教員は、デジタルでできることはデジタルでやればよいという考えになりがちである。夏の全国大会の榊先生の講演にあったように、デジタルの弊害についても考えていく必要があるが、国がIGAスクールを推進しているので学校全体として取り組むのは難しいと思われる。しかし、学習を積み上げる以前の健康な心身を作るという土台部分がぐらついている子どもが多い現状を踏まえると、基本的な生活習慣について学校が発信していくことは必要だと思う。

4 いいのか 教科担任制？

研修は、個別最適な学び、協働的な学び、探究的な学びなどを掲げている学校が多く、窓口教科を国語や算数のように決めている学校は少な

い。そのため若い先生が、国語や算数などの教科について学ぶ機会が減っているのではないかと感じている。また、教科担任制を高学年で実施する際に、1組と2組の担任が国語と算数を交換して持つ学校もある。1教科の教材研究で2クラス授業をするので楽になるが、長い目で見ると国語が算数の指導経験が減ることや、別の年度に経験のない教科を担当する場合もあるなどのデメリットがある。中学年でも教科担任制を導入するという話を聞くと今後が心配である。教科担任制が進むと担任の授業が減るので、生徒指導が大変なクラスを学年主任がもつという学級編成も見直す必要が出てくると思われる。

本質的なことを見極めて、大切なことをやり続けることが重要で、そのためには学び続けることが欠かせない。現場の裁量を確保し、やりがい奪われないように、知恵を絞ってできることを見つけていきたい。

理想を語り合える仲間がいるか？

丸小野 聡暢

理想を語る事ができるか

教師不足、長時間労働、教育DX、少子化、子どもたちの多様化など教育現場が抱える問題は多種多様です。近年、社会はめまぐるしく変化し、新たな学校教育が求められています。一つ一つの問題に時間をかけて丁寧に対応していくことが望ましいですが、そんな悠長なことを言っている暇はありません。全ての問題を同時並行で、高いレベルで解決することが求められます。しかも、失敗は許されません。ベテランも若手も四苦八苦しながら毎日を乗り切っているのが現状です。学校現場はブラックと叫ばれ、日々忙しさは増し、教育を行っているというより業務をこなしているという言葉がピッタリ当てはまります。ただ、教師が多忙であったことは今に始まったことではなく、以前からではないでしょうか。昔から、いじめ、不登校、学級崩壊などの

問題はありましたし、その対応へのストレスもあつたと思います。ただ、個人で解決できたり先輩に相談したりすることで対処できるような問題でした。いつからでしょうか。学校教育に信頼がなくなり、保護者が若手教師の成長を温かく見守ってくれる時代は終わり、逆に保護者がクレマー化し、要求が激しくなってきました。そのため、学校や自治体はクレームがこないように、組織的な対応という名のもと管理体制が強くなってきました。背景には、SNSの普及が影響を及ぼしている気がします。SNSがない時代は、前日に見たテレビ番組や好きなアイドル、放課後遊び、スポーツ少年団など共通の話題で子どもたちはつながっていました。教室が子どもたちのコミュニティの中心でした。しかし、現在はSNSでそれぞれの趣味でつながったり、放課後は習い事で友達と遊ばなくなったり、

教室が子どもたちにとって、コミュニティの中心ではなくなりました。それぞれがコミュニティを持ち、クラスの子どもたち同士の間が希薄になってきています。そのため、ちよつとしたことでトラブルになったり、そもそもクラスの子に興味を示さず友達関係さえ作らなくなったりしています。そのため、学校では人間関係作りやトラブル解決、放課後は保護者対応に追われている感じがします。また、授業では、主体的・対話的で深い学びによる「話す・聞く」を多く取り入れた授業が行われていますが、休み時間はトラブルを恐れ、あの子とは関わらないようにと指導があるのが現実です。教師は授業では子どもたちに主体者としてコミュニケーションを求める一方で、席替えでは、教師の偏見と親の要望でこちらが決め、限定された中でのコミュニケーションで終わっています。子どもを成長させるとか一人も見捨てないと言っていますが、言動が一致していません。また、何か起こったときに子どもたちに考えさせるのではなく、すぐに禁止事項だけを増やしていき、ますます窮屈になっていきます。

学校とは、本来学力をつける場所です。

そう思って、私は学力づくりに力を入れてきましたし、子どもも保護者も学校は勉強をするところだと思っっていると思っっていました。ところが、最近は校内でも学力づくりが話題の中心ではなく、学校は「楽しく学ぶ場所」から「楽しく過ごす場所」に変わりつつあります。保護者も、学校は安心・安全に楽しく子どもが過ごせれば良いと考え、学力を求める保護者は塾に外注しているのではないのでしょうか。

このような現状とも重なり、現在の多くの教師の関心は、学力づくりより学級づくりになってきました。学級づくりといっても、子ども同士がトラブルを起こさない、保護者からクレームがこない、事なかれ主義の学級経営です。それとともに、教室に自由度がなくなってきました。責任転嫁ではないですが、学年で教室掲示は揃えられ、効率的な指導の名のもとに、机の中やロッカーの荷物の置く場所まで指定されるようになってきました。また、自治体から授業のフォーマットまで決められ、〇〇スタンダードが各学校の主流になっています。教

育水準を保障するために、共通の指導事項

を持つことは大切ですが、全てを揃えることには疑問を持ちます。何を揃えていくかは、精選していかなければいけません。ある学校でこんなことがありました。夏休みの宿題を2学期の初日に確認をして返却をしたそうです。すると保護者から「うちの子は長い時間をかけて宿題をしたんです。1日で返すって何ですか。先生もしっかりと時間をかけて見て下さい」と電話があったそうです。これは、その場で担当が対応して終わりそうなものです。しかし、後日、管理職から職員に対して「今後は、長期休みの宿題は、1週間は返却しないように」と伝達があったそうです。このような対応は、クレームへの配慮だとはよくわかりませんが、一つクレームが入れば、子どもたちの学校生活のきまりのように、全てが統制されていきます。こうした管理体制の雰囲気は過剰なまでへの縛りへと繋がり、教師のやりがい搾取しています。教師は、目の前の子どもたちの実態を把握して、授業や掲示物を工夫し、一緒に学級をつくっていくことが理想です。昔は、先輩や同僚と

授業や学級について自分の夢を語り合うこ

とができていました。また、先輩方は、私ができることを後押ししてくれ、失敗に對して責任を取ってくれていました。人はやりたいことに時間をかけることは労を惜しみません。情熱大陸の番組で「早田ひな選手」の特集を見た時のことです。卓球が好き、絶対に負けたくないという気持ちが原動力になり、ハードな練習を行っていました。パリオリンピックのダブルスに向け、張本選手と練習をする時間が取れないときは、大会で負けた日に張本選手が会場を訪れて一時間のコンビ練習、一点の取り方のために一時間反復練習を行っていました。ただ、早田選手は苦に思っていませんでした。スポーツ選手にとって練習することが労働時間ですが、ブラックとは感じていません。それは、私たち教師も同じではないでしょうか。自分がやりたいことができるならば苦に感じません。ならば、今、私たちの職場で奪われているものは、時間ではなく「夢」や「やりがい」です。職員室で理想を語り、お互いに応援できる雰囲気を作ることが大切にしていききたいものです。

教育課題「こころのこころ」から「謙虚」に「貪欲」に

古東 秀一

はじめに

私は、昨年度、広島県で小学校の教員として採用され、初任は三年生の担任、今年度は五年生の担任をしています。昨年度開催された「先生のための学校」から学力研の講座に参加し、今年度は「授業づくりゼミナール」で、学力研の皆さんとともに日々学ばせて頂いています。

教育現場の実態

昨年度から教職の現場で働き始めましたが、教育現場にはたくさん課題があります。教育では、そうした課題を二項対立で捉えられることが多いです。例えば、「教師主体」と「子ども主体」、「一斉授業」と「個別最適な学び」というような形です。しかし、目の前で生じている教育課題は、複雑でそうした対立関係で片付けることは難しいと考えます。今回はそのような実態を踏まえつつ「児童の実態」「授業づくり」「学

級づくり」三つで整理したいと思います。

児童の実態

自身の学校での児童の実態をまとめさせてもらおうと思います。

児童の実態としては、優しい思いやりのある児童が多くいる一方で、他者の感情を考えすぎるあまりに積極的にコミュニケーションが取れず困っている児童もいます。また、自ら関わりに行く反面、相手の反応がわからず誤ったコミュニケーションを取ってしまう児童も多くなります。

また、児童の様子を学習の基本である「読み」「書き」「聞く」「話す」の視点で見ると、「読み」の代表的な活動である音読では、意味を理解する音読ではなく、声に出して読む段階にとどまっている児童も多く、さらには言葉のまとまりがわからず文字の拾い読みになってしまいう児童もいます。「書き」では、板書をノートにまとめるのに加

えて教師が言ったことをメモする児童もいるが、板書にある文字を視写することに必死になってしまい、学習内容を十分に理解できていない児童もいます。「聞く」場面では、友達や教師の話を丁寧に聞こうとする姿勢が多くある一方で、ビジュアル的な支援がなければ一斉の指示を理解することができない児童もいます。「話す」では、思ったことや感じたことを積極的に話す様子が見られる反面、とめどなく話を続けてしまう様子も多く見られます。

授業づくりの課題

近年、ユニバーサルデザインアプローチやインクルーシブシステムの考えが教育に広まり、授業実践のあり方も変化しています。私自身も今年度、広島県のプログラムで社会科の授業において「単元内自由進歩学習」に取り組んでいます。従来の一斉授業とは異なり、児童自身で学習の計画を立て、自分がやってみたい学び方（ノート、タブレット、ワークシート等）を選択しながら学びを進めていくというものです。

児童個々の自由な学びが多く見られる反面、教師が意図した発問を通して見られる

活発なペア活動・グループ活動、全体で議論するという一斉授業のおもしろさを見ることは難しいです。

重要なことは、個々の自由な学びにとらわれすぎず（もちろん個々の思いには寄り添いつつも）、一斉授業で積み重ねてきた実践を改めて見つめ直すことではないかと考えています。

学級づくりの課題

学級づくりでは、児童の実態と照らしても児童が安心して過ごすことができる環境が求められていると考えています。社会的状況が、核家族化やコロナ等の影響によって閉鎖的になる中、児童自身が安心して過ごすことができる居場所が少なくなっています。また、SNSの発展やスマートフォンの普及により、従来は「学校は友だちや先生と関わる場」「家庭は家族で心休める場」だったのが、学校でも家庭でも友だちのことを意識する場面が多くなっていると考えます。実際、児童が十分に気持ちを安らげる場面や時間も少なく、学校に来た時にはすでに心身ともに疲れた状態で登校する児童も少なくありません。

そうした状況を踏まえると、様々な人と関わる学級において、児童に、人と関わることで生まれる「心の温かさ」や自分自身が「他者から認められる嬉しさ」を実感させることが重要だと考えます。

課題を教師としてどう受け止めるか

昨年度初任としてここまでで示した実態を目の当たりにした時に、正直何をすべきで何から始めるべきなのか、そして児童にどう関わればよいのかが分かりませんでした。加えて、教員の働き方や多忙な日々慣れることができず、特に四月は困惑した日々を過ごしていました。初任者指導の先生からは「このままだと学級崩壊するよ」と言われたこともあり、心身ともに焦りとどうしようもできない不甲斐なさを感じたことを覚えています。

そんな時、学生時代に読んでいた岡本美穂先生の「あいの力」の本をもう一度手に取り読み返しました。そこには、困惑していた自分に刺さる言葉と実践がたくさんありました。そして、実際に直接話を聞いてみたいという思いで、裏表紙にかかれていた「学力研」の文字を調べ、先生のための

学校に参加するのことにしました。

ここでは、音読指導や計算指導、聞き方指導、掃除指導など、学力研が積み重ねてきた様々な指導の原則が紹介されていました。学んだ実践は、次の日の学級すぐに実践しました。実践を積み重ねていくにつれて児童の姿は生き生きとしたものに変容していき、私と児童との信頼関係も築き上げることができました。

おわりに

ここまで私が思う教育課題と、それに対してどう向き合っているかをお話させて頂きました。昨今の教育課題を挙げるときりがあります。そうした課題に不満を言うようになる時もあります。しかし、課題をどうにかすることを考えるよりも、課題にどう向き合い、自分がどう行動するかが大切なのだと感じています。教師だって人間です。悩む時は悩んでいいと思います。ただ、がむしゃらに目の前の児童のことを思っただけで、「謙虚」に「食欲」に取り組み続けることで、児童も私のことを信じてついてきてくれると思うのです。

教師が元気にイキイキと働いてこそその条件づくりを

図書 啓展(ずしょ ひろのぶ) 大阪みなみ学力研

●教師が一番困ることは・・・

この頃子どもトラブルが増えてきた、めごとの仲裁に入ればかり、授業中さわがしくなってきた、子どものけがが続出・・・教師が一番困るのはクラスが落ち着かなくなり、問題行動が多発することでしょう。

指導困難や「学級崩壊」(いやな言葉ですが)に陥った場合は学校や教室に向かうことさえ避けたくありません。

最近は「学級崩壊」が変化してきているという指摘もあります。

「昔の学級崩壊は担任への反抗が目的で起きていた・・・(中略)・・・最近の学級崩壊はそれとは真逆のケースも見受けられるようになってきました。

優しく丁寧なすてきな先生。どの子ども担任の先生のごが大好き。

そんな先生のもとでも学級崩壊が起きるのです・・・(中略)・・・大好きすぎて担任を

独占したくて問題行動を起こす。それがつながらあつて学級が落ち着かなくなっていく。そのような状況が多く見受けられます。「学級崩壊」と一口にいってもその質は変化してきています。」(「教室の荒れ問題行動対応ガイド」古田直之著)愛着障害と言われる事例の報告も増えて来ています。

私自身も、転勤早々指導困難なクラスを任されたり、「荒れ」をひきずった学年を担任したりする経験をしてきました。そのときの「荒れ」の中心メンバーの多くは低学力にあり、クラス挙げて学力回復を図る中で落ち着いていきました。基礎学力保障と生活指導の一体化の原則を学びました。

大切なことは、指導困難なクラスを担任だけで抱え込むのではなく、学年や学校でサポート体制を作っていくことです。特にお互いのクラスの授業や子どもの様子、悩みなど日頃から知っておくことは指導困難を予防する

大切なことは、指導困難なクラスを担任だけで抱え込むのではなく、学年や学校でサポート体制を作っていくことです。特にお互いのクラスの授業や子どもの様子、悩みなど日頃から知っておくことは指導困難を予防する

第一歩です。職場の「同僚性」がカギです。

最近「チーム担任制」の導入で「学級崩壊」は防げるという主張もあります。しかし、そのチームの人間関係がうまく行かなくなると、新たな困難を抱えることにもつながります。導入には慎重な検討が必要です。

●やってほしいことベスト10

指導困難に陥る遠因や、学校現場の困り感の原因には、実は労働条件や教育条件が大きい関わっています。

教職員組合でアンケートがありました。その意見集約では、「やってほしいことベスト10」として次のものが挙げられています。

- ・30人以下学級
- ・仕事に見合う給料
- ・5時に帰れる
- ・特別教室(理科室・家庭科室・音楽室等)にエアコン設置を
- ・校務分掌の精選
- ・人事考課制度の廃止(評価育成システム)
- ・研究授業減らして
- ・職員専用のトイレ設置
- ・リフレッシュ休暇復活

・ハラスメントのない学校園づくり

他自治体・他道府県ではすでに実現できているものもあるでしょう。貧困な教育条件・労働条件の反映です。どれも至極真っ当な願いだと言えます。本当に教職員はこのような中でよくやっているとします。

ただ研究授業については、意見が分かれるかも知れません。研究授業が教員の教育力量向上のために役立つ面もあるからです。

●余りに過酷な労働実態

しかし、今現場で若手の先生が困っているのは、「スクールアドバイザーの意見により授業予定日の数日前に内容が変更され、前日の22時過ぎまで学校に残って授業準備を行わざるを得なかった」とか、

「通常の研究授業以外にも若手研修や行政区での研究授業など年間複数回の研究授業のたびに約5000字〜7000字に及び指導案を作成。検討会を実施、添削・再検討等が日々の担任業務・校務分掌の仕事と並行に行われるため、時間外勤務が当たり前になっている」などの過酷な実態です。

今、国も各教育委員会も「働き方改革」と

して勤務改善を図ろうとしています、

「1か月の時間外勤務時間が45時間を超えない。1年間の時間外勤務時間360時間を超えない」【大阪市教育委員会】

「教師が十分な生活時間や睡眠時間を確保し、心身ともにゆとりを持ち教育活動を行うことができるよう、教師の健康福祉を確保するため、11時間を目安とする『勤務時間インターバル』を確保するための取り組みが促進されるよう、国は、学校の特性も踏まえた留意事項や工夫事例を整理していくことが必要である」【『令和の日本型学校教育』を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について（審議のまとめ）】

などと示される方向と大きくかけ離れているのが学校現場の実態です。

毎年、若手教員が病休に入ったり、現場から去ったりする、また教員志望者が年々減少したりしている背景の一つはこの過酷な労働環境です。楽しみにしていたはずの教育実習で過酷な労働実態を経験し、教職をあきらめてしまった例も聞きます。

少人数学級の実現と教職員定数の改善、長時間過密労働の解消、定額働かせ放題の給特

法改正、など教育にもっともお金をかけてほしいものです。

●学習指導要領の見直しを

「教育改革」や学習指導要領改訂のたびに教えることが雪だるまのように増えていく現実。しかしあれも、これもと詰め込み過ぎ、現行の指導要領の下で学校現場が疲弊しているカリキュラム・オーバードの問題も大きいです。不登校の子どもが増え続け、病休・精神疾患の教員が増えている遠因になっています。教育課程の時間数と内容量のどちらも増えている中で、定時に帰宅することは多くの教員にとってほぼ不可能となっています。

「現役の小学校教員に行った調査などから、現行の指導要領が最も子どもへの負担が大きく、不合理なものになっている。」

「私たちの行った調査では、…(中略)…おおむね平日5時間くらいをちよつといいと感じるという結果が出ました。」(大森直樹東京学芸大学教授)

次期学習指導要領改訂に向けて、標準授業時数や学習内容の削減が本気で検討されることを強く望みます。

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長 岡本 美穂

「模型のまち」 (東京書籍)

毎月、小学館で紹介させて頂いている板書についての原稿を書いています。今回は、新教材です。この原稿を読んでもださった吉永先生がこのような感想を送ってくださいました。

「東書教科書、すていなと思いました。胸が熱くなりました。新教材です。で、現在子どもたちが、亮にどのような自分を映し出すのかが分かりませんが、映像と使い慣れた言葉で国語と思い込んでいる国語教室に渴をいれた教材と思って「模型のまち」をよんでいます。」

えまじょう」というよびかけが今回の先生の板書で感じ取ってもうええといなどおもいました。」

1 単元の計画 (全5時間)

1. これまでの学習を確かめ、単元の学習の見通しを持つ。
2. 「模型のまち」の構成をとらえ、登場人物を確かめる。
3. 表現の効果について考える。
4. 物語を読んで、感じたことや考えたことを伝え合う。
5. 単元の学習を振り返る。

2 板書の基本

「模型のまち」は、広島在住の作家、中澤晶子さんの作品です。戦争文学です。子どもたちにとって当時の状況を想像するの

が難しいなか、まるでその当時を体験したかのような、「自分ごと」として考えることができる作品となっています。現代の小学生在が主人公の作品です。

この単元では、「表現に着目して読み、考えたことを伝え合おう」というつきたい力を設定し子どもたちと確認しました。

これまでに、5年生で「注文の多い料理店」で「表現のくふうをみつける」、4年生「一つの花」で「物語のだいたいな言葉に着目する」学習を積み重ねています。5年生の表現の工夫では、

- ・音や様子を表す言葉
- ・色を使った表現
- ・たとえを使った表現
- ・同じ言葉や文がくり返し使われているところ

・複数の意味がこめられている表現
を見つけて学習してきました。そこで、今回は、物語の題名や、くり返し出てくる表現、情景描写などに着目しながら、「表現の効果」を捉えることをめざします。

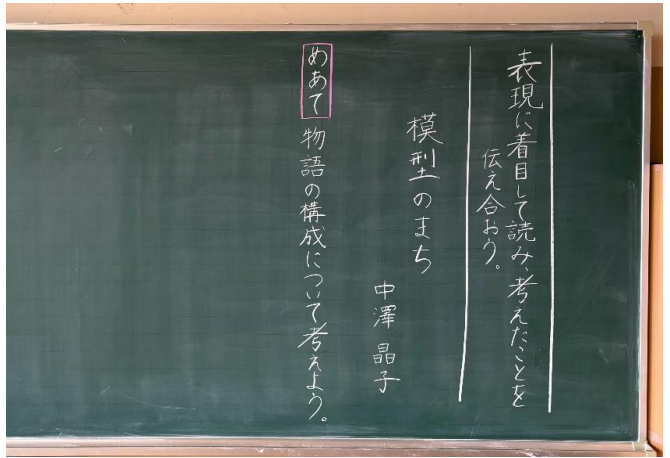
板書では、毎回学習用語の短冊カードをいかすようにします。学習を振り返る際に、

短冊にした「学習用語」のカードを作成しておく和良好的でしょう。この短冊は、単元の学習後、「言葉の宝箱」として掲示物にすることで、一年間意識して学習をつなげることができるようになります。今回は、「色彩表現」「物語の題名」「くり返し出てくる表現」「情景描写」という短冊カードを活用しました。また、以前物語の学習で活用していた「場面」「設定」「山場」「冒頭と結末」などのカードも活用します。

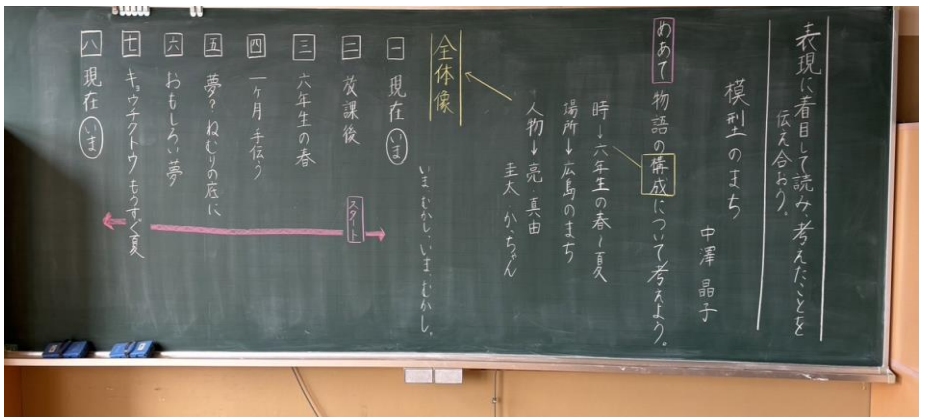
【板書のコツ】

2時間目

今回のめあては、「物語の構成について考えよう。」です。つけたい力である「表現に着目して読み、考えたことを伝え合おう」は毎回確認するようにします。



その後、物語の構成は何かを確認して、大きく3つで分けました。「時」「場所」「人物(登場人物)」です。この教材は長文なので、あらずじ理解も含めて基本的なことをまずは確認しました。場面分けがもととされている教材ですが、この項目で見えていくと全体像も見えてきます。そこから1から8場面までを時で分けて読んでいきました。



このように、1から8場面まで、確認しながらノートにもまとめていくなかで、子どもたちが書きながら気がつくことがあります。

ました。それは、1場面と8場面の始まりです。1と8場面は現在ではじまる「今」そこから、スタートして再度また8場面「今」に戻っているということでした。その気づきは赤色の矢印で表現しました。そして、「いま、むかし、いま、むかし。」という表現もつ



なげて考えていたので、板書することで全員ができるようにしました。

3時間目

今回のめあては、「表現の効果について考えよう。」です。表現のくふうについては、5年生の「注文の多い料理店」でも

学習しています。

初発の感想の交流にて、「ビー玉」「模型のまち」という言葉に注目している子どもたちが多かったので、この2つの言葉で表現している部分を見つけ、まず交流していきました。

教科書に線を引きながら、子どもたちはそれぞれの表現に着目していきます。

このようにまとめていくことで、子どもたちは「まち」がひらがなになっていること、題名とつながっていること、色彩表現されていること、気づきは増えていきました。そして、ここで「ビー玉」「模型のまち」は亮にとつてどんなものだったの、と発問しました。

すると、亮を変化させたもの、今と昔をつなぐもの、戦争について考え自分事にしてくれるもの、意見が出てきたのでまとめていくことで、子どもたちが「表現に着目して読み、考えたことを伝え合う力」に近づけていきました。



教科書にない問題を考えさせる

小学校で教える理科の学習内容は、突き詰めて考えると、その理由がわからない場合が多い。

例えば、種子。

水・空気・適当な温度によって発芽するとされているが、それでも発芽しない場合がある。何千年前の種子が発芽することもあるというのに。

例えば、花。

花を開くことによつて、虫を呼び寄せ、蜜を与える対価として花粉を運んでもらう。でも、日本に多数生息する桜・ソメイヨシノは、受粉して実をつけることはない。なのに、なぜ花を咲かせるのか。

例えば、葉。

植物の葉に日光が当たると、二酸化炭素と水を使って、でんぷんを作り、酸素を作る。しかし、空気中の二酸化炭素は約0.04%しかない。そんな微量な二酸化炭素で光合成ができるのだろうか。

以上のような問題を突き詰めて考えることは、私としては面白い。ただ、授業として扱うと難しくなりすぎて、子どもたちがついてこれない場合が多い。

授業プラン 「チューリップの花が開いたり

閉じたりするのはなぜか。」

五年理科「花から実へ」の教科書の学習内容が終わった後に、発展として扱った。

チューリップが朝・昼と開いていき、夕方に閉じていく動画を視聴させた後、「なぜチューリップの花は、昼に開いて、夜は閉じるのか？」の問いを出した。

「一つでも理由が書けたら、黒板に書きにいきましょう。かぶつても構いません。」

板書がほぼ埋まったところで、一つ一つ読ませていき、こちらで分類していった。

【日光のため開く】

・日光をたくさん受けるため。

・チューリップは日光が好きだから。
・昼はたくさん日光をあびるため。

【夜は寒いから閉じる】

・昼は日光を浴びて成長して、夜は寒いから熱がこもるように閉じる。

【閉じて熱を逃がさない】

・昼は光合成で日光でエネルギーを作つて、夜はエネルギーがぬけないようにするためとじる。

【温度が高いから開く】

・昼は温度が高いから、暑くて熱をさまそうとするけど、夜はずいずいから花をとじていても暑くなりすぎないから。

【虫が来るから昼は開く】

【天敵が来るから夜は閉じる】
・夜に天敵が来るから閉じている。だけど、昼はハチなどの虫が来るから開いている。

板書された意見は以上で、そのあとは挙手発言で別の理由を発表させた。

【花粉をもらいすぎないように閉じる】

【生き物のねどこになるために閉じる】

【夜、花粉を作るために閉じる】

【湿らないようにするために閉じる】

ほかのクラスでは、

【受粉するために開く】

- ・昼は虫の活動時間だから受粉するため。
- ・花粉を飛ばされないために閉じる。
- ・花粉がとばされないようにするため。

子どもたちの発表の後に、ヒントとして、ある教科書の一部を提示する。



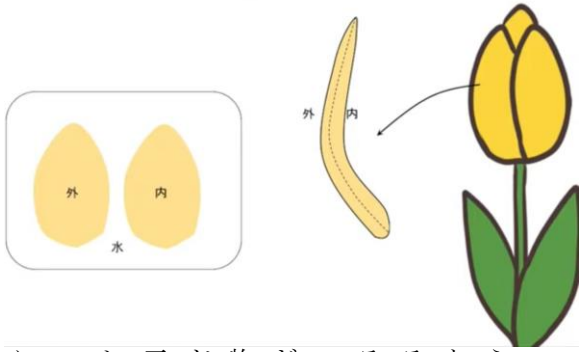
『わたしたちの家
庭科5・6』（令和
6年度版、開隆堂）
の「衣服の手入れ
と整頓」である。
教科書をざっと調
べてみても、アイ
ロンのイラストは
これだけだった。
(使い方は載って
いない。)

アイロンをかけるイラストをよく見ると、
白いものがアイロンの後ろから噴き出てい
る。多分、スチームアイロンなのだろう。
スチームは、熱した湯気です。要するに、
熱した湯気（温められた水）を元は植物で
あった布のしわを延ばす役割をしているわ

けである。

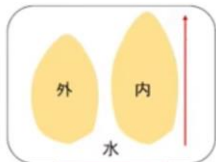
「なぜ、チューリップの花は、昼に開いて、
夜は閉じるのか？」

このタイトルの動画が YouTube にある。
「倉橋のオンライン理科教室」の一つとし
てアップしている。(有難い)

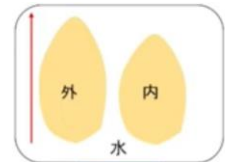


チューリ
ップの花び
らは、外側
と内側であ
る違いがあ
る。

それをイ
ギリスの植
物学者ウツ
ドが一九五
三年に実験
したそうだ。
温めた水
に入れると
花びらの内
側が外側より伸び、逆に冷たい水に入れる
と花びらの外側が内側より伸びるそうだ。
左のような感じですが。チューリップの開
閉に必要なのは、水と温度なのです。



あたためる 約18度より高い



冷やす 18度より低い



この後、「水の上で咲く紙の花」を実験さ
せていく。日本ガイジのホーム・ページに詳
しい作り方が載っている。
折り紙で作った花びらを内側に折って、
水に浮かべると、水の上に見事に花が開く。
ちよつと感動できる。

一、大きさをどう実感させるのか？

歴史の授業で「大きさ」をどう子どもたちに捉えさせるのか。現場の教師はこれまでに、色々と工夫を重ねてきました。

この文を読んでいただいている先生方、思い出してください。自分が子どもの頃、歴史の授業で「大きさ」をどんな風に教えてもらっていましたか。

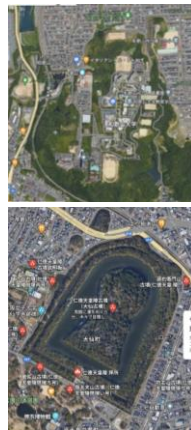
ICTがなかった時に、現場の教師はどんな実践をしていたのでしょうか。私が若い頃に出会った実践は、大仏の手を模造紙で作るといふものです。中学校か高校の実践では、運動場に大仏の等身大の絵を描いたというものもありました。屋上から眺めるのです。私も大仏の手を模造紙で作ったこともありました。

今は、東大寺ミュージアムの入口に大仏の右手と左手のレプリカが展示されています。迫力がありますよ。



大仏の見学に行った時に子ども達に見せたいですね。そのためには、できれば見学前に大きさを授業の中で考えさせてから見ることで、より大きさを実感することができそうです。

古墳の大きさを考えさせる時には、校区の住宅地図を子どもに配布し、赤鉛筆で、大仙古墳（伝仁徳天皇陵）を書かせました。様々な大きさを子どもたちは書きます。それを発表してから、答え合わせは、OHPを使いしました。OHPなんて、若い先生はご存じないと思います。もしかすると学校の教員室の奥の方に捨てられずに残っているOHPがあるかもしれません。透明のシ



ートを台の上に置くと拡大してスクリーンに映写することができきる装置です。まずは、地図を置き、その上に古墳の大きさシートを置くのです。

今はICTを使うと、タブレットに地図を送り、ペンで形を描かせて、それを発表し、答えを発表するということができます。

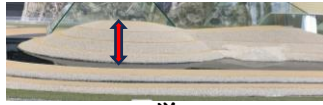
比べたものは、私が勤めている和歌山大学の敷地の地図です。大仙古墳の中にすっぽりと入ってしまいます。

教科書の写真を使って縦横の長さを確認します。巨大だというのが、分かります。グーグルマップを使って、その場に行ったような体験もできますね。

教科書では上からの写真です。教科書には想像図がイラストで描いていますが、高さも考えさせたいものです。ICTも使いつつ、クイズを出して高さも考えさせます。



学校の校舎などと比べてクイズ



をだしてもいいですね。高さは約35m、ビルの高さでいうと一階ぐらいです。大きな山を平地につくりだしたのです。大仙古墳は、堺市大仙町にあります。江戸時代の地図には「大山」とあります。昔の人にとっては、大きな山だと思ったのかもしれません。

イラストで土や石を運ぶ様子が書かれています。大きき・高さをくわえることで、土工事の大変さが少し分かってきます。

二、アナログのよさも取り入れて

ICTはとても役に立つ道具ですが、画面の大きさに制限があり、目の前で大きさを実感させるのには、難があります。

蒙古襲来（元寇）元との戦いの時に、幕府が築いた防塁の高さは、模造紙などで作ったほうが効果的です。教科書では、防塁の前に六年生の子どもを立たせた写真が載っていますが、驚きが湧きません。

学力研の集会で有田和正先生に登壇してもらったことがあります。講演の中で有田先生は、新聞紙で作った防塁を壇上から下げられました。高さを実感しました。

私は、有田先生から学び、防塁を模造紙で作り、脚立にはりつけて、上ってみました。その高さから、弓矢を放つのです。戦闘の様子イメージしやすくなると考えました。

高さだけなら新聞紙でもいいと思います。私はもう少し凝ってみました。防塁を見学し、真正面から写真をとリ、縮尺を考えて模造紙に積んだ石の形を描いたのです。新聞紙よりも、どれぐらいの大ききでどんな

形の石をいくつぐらい積んだのかで、作る時の鎌倉時代の人々への思いを想像させたいと思ったのです。

いつもいつも私が書いてきたような準備はできないかもしれませんが、でも、歴史の授業の1ヶ所でも、工夫をされてはどうでしょうか。



これまで日本の教師が積み上げてきた教育実践から学び、それを今の時代に合わせ、より子ども達が歴史を身近に感じられるような「あなたのクラスでの実践」を作り上げて欲しいです。

現場の子どもの様子、そして若い先生方の感性やICTの知識を生かして、子どもたちが喜ぶ歴史授業を構築していつてくださ。来月は、資料の見せ方について考えていきます。

先生のための学校第2回 報告

丸小野 聡暢

講座A「漢字」鈴木 基久 先生

鈴木先生は、普段の漢字への取組と習得への課題から実践を報告してくれました。漢字を覚える取組がドリルやノートへ書くことが中心になっていることが課題とのことでした。漢字が書けない子は、書く前に読めないことが多いと発達段階から丁寧に説明をしてくれました。漢字の習得には、読みを先行させることが大切であることも、鈴木先生が開発された「リズム漢字」で読みを先行させる実践を紹介されました。音読は苦手な子でもできるはその通りだと思えます。書くことでは、筆順の基本を押さえることや下の学年の復習が大切であることが述べられました。ただ「一、二、三、く」と唱えるのではなく、『秋』であれば、「ノを書いて木を書いて」と形や意味を筆順通りに押さえることが書くことへの習得につながるとのことでした。

講座B「算数」岸本 ひとみ 先生

習熟の発達の意義をもとに算数への取組について講座で話をしてくれました。子どもたちが、学力をつけるには「できる↓わかる↓できる↓わかる」の繰り返しで伸びていくことが本質であるとのことでした。わかるが先かできるが先かと議論されることはありますが、2つの繰り返しで子どもは伸びていきます。そのことを教師が理解して授業をすることが大切であることを改めて実感しました。また、授業展開の中に習熟をする時間を確保していました。現在は、履修主義の傾向が強く、教科書通りに進めるだけで、習熟が後回しになっていることや家庭学習任せになっていることと言及されました。授業は教科書に合わせて一方的に行うのではなく、子どもの実態を把握して担任が授業づくりをしていく基本であることを再確認しました。

講座C「学級活動や学級会など自治を育てる取り組み」吉田 雅直 先生

吉田先生は低学年の学級づくりと学力づくりについて、これまでの経験をもとに実践を報告してくれました。吉田先生は、安心・自信・自治をキーワードに学力・学級づくりを行っています。それぞれの言葉を吉田先生の言葉に置き換えて伝えてくれました。まず、なぜ信頼関係が大切なのか、子どもが不安になっている原因や信頼関係を確立させる取組について丁寧に話してくれました。また、子どもが自信をもてる学力づくりや自治につながる学級づくりの取組について子どもの成長の姿から話してくれました。その中で、私が印象に残った言葉は共同です。同じクラスの中で、みんなが同じことをしてつながり、伸びていく大切が伝わってきました。

短い文章の中では、三人の先生方の実践の細かい部分は伝えきれません。今後もし「先生のための学校」の講座は続きます。是非、講座に参加されて学力研の先生方のお話を聞いてください。

◇学力研最新情報 岸本ひとみ ●できた!!!合格したよ

私のクラスは、ただ今第一次計算カード検定の真っ最中。6月と7月に学習した「10までのかずのけいさん」の習熟期間です。

1年生の子どもは、ひとつのことの集中力が高いです。また、クラス一体となって取り組むこともとても上手です。休み時間にも、「聞いて、聞いて。」

とお互いに検定し合っています。そして、毎日、帰りの会で、「今日の合格者は、⑦が〇〇さん、⑩が□□さんでした。おめでとう!!!」

と発表して、起立。みんなで盛大な拍手を贈ります。この拍手をされる瞬間が大好きなようで、得意満面で帰っていきます。

●闇練習もしています

このカード練習、家庭学習に丸投げしてしまいがちですが、全員が合格するためには、あの手この

手のフォローを設けなければなりません。私は、

- ・学童保育におじやまする。
- ・家庭に直接依頼する。
- ・休み時間に練習する。

の3つの方法をとっています。

ある程度、正確に、速く、できるようになった時点で、友だちとの練習に委ねるのがコツです。この時期に、この闇練の何がその子に合っていたのかも、記録していきます。それを、2年生担任に引き継いでいくためです。

●「やればできる」を体感すると

1年生で、「がんばったからできた」という経験を持つ子どもは、その後、習熟が必要な課題に対しても、あきらめずに、粘り強く取り組みることが出来ます。そのことが、学校生活の質を上げることにつながっていきます。もしかしたら、人生を左右するかもしれません。それを考えながら、日々実践を続けています。

◇事務局だより 岡本 美穂 ●第18期先生のための学校

9月 振り取りより

■先生方の話を聞きながら、学級づくり学力づくりどちらに置いても人として接すること教師としてできることリアルな授業展開にしていくなかに求められていることに挑戦していかなければならぬと強く思いました。国語や算数など漢字計算は取り組みやすいですが、読解力に繋げるためにも日々模索しながら進めていきたいと思っています。

■「習熟する時間がない」ことが多いですが、しかし、授業計画を見直して、習熟の時間を確保する。「ていねいな習熟」を心がけ、子ども達には算数で困らず、自信の持てる子になってほしいと思います。家庭学習を自分からする子どもに。

■三人の先生方、今日はありがとうございました。鈴木先生はやはり学力研の漢字の第一人者ですね。今日のお話を聞いて下学年のさかのぼり指導が不十分であることに気付き、焦りました。ひとみ先

生のお話にも関連することですが、習熟が子ども任せになっていないか、考えて実践を見つめ直してみます。伸びる子はぐんぐん伸びていますが、変わっていない子もいるんですよ。焦っても駄目だとは思いますが。吉田先生が「自身の実践を安心・自信・自治という三つの視点で整理されてお話されたこと、とても勉強になりました。実践している内容については重なる部分も多いのですが、何を意図して行っているのかを自覚しているのかいのかによって出てくる結果は違ってくると思います。予習課題も大切にしないとイケませんね、少し抜けていました。

■3人の先生方の具体的なお話が、参考になりました。久しぶりの久保先生のお話を聞き、考えさせられました。ありがとうございました。

●次回の先生のための学校

10月12日(土)会場(たかつがーデン) 会場費:1,000円

<https://www.kokuchipro.com/event/6>

03fb363102a60d74be5f115c5c178

学力研カレンダー



《各地のサークル・部会 2024年 10月 例会、イベント》

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

10/

- | | | | | |
|--------|-------------|---------|-----------------|---------------------------|
| 18 (金) | 春日井学力研 | 18時半～ | レディヤン春日井(JR勝川駅) | 山口 080-6904-1697 |
| 19 (土) | みなみ学力研 | 9時半～12時 | 阿倍野区民センター | 図書 nobu580701@yahoo.co.jp |
| 25 (金) | いろえんぴつ (加印) | 18時半～ | 天満南小サークル室 | 岸本 090-9117-6330 |
| 25 (金) | 伊丹学力研 | 18時半～ | ※阪急武庫之荘駅近く | 前田 090-9715-3830 |
| 26 (土) | 大阪教育サークルはやし | 午後 | エルおおさか | 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp |

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等のご連絡下さい。

○持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を 前田 090-9715-3830

○神奈川学力研 は しばらく休会します

《全国キャラバン等 今後の予定》

○学力研・先生のための学校【全6回】

8月25日 (日)	13時半～16時【済】	9月14日 (土)	13時半～16時【済】
10月12日 (土)	13時半～16時	11月9日 (土)	13時半～16時
2025年 1月18日 (土)	13時半～16時	2月8日 (土)	13時半～16時

●第8回 1年生講座 10月26日 (土) 13時半～14時半 オンライン

対面講座：8月 (エルおおさか)・10月・1月 (たかつガーデン)

(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで)

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

ご意見・ご感想は下記まで

荒井 賢一 E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp

李 詩愛 E-mail iwamotoshie@gmail.com

堀井 克也 E-mail katsuya4k1h9@gmail.com